
counter-カウンター-

高天リオナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

counter - カウンター -

【Nコード】

N9906S

【作者名】

高天リオナ

【あらすじ】

入学早々、大怪我を負い、入院生活を強いられて しまった^{くらま}本^{もと}翔^{かける}。
自分のせいで替え玉役を担う双子の姉を、齒がゆく 案じる日々を送っていた。

そんな中、なぜか、口喧嘩相手が欠かさず見舞いに 訪れて・・・。

01・君だけは知ってた(前書き)

> i 2 3 2 2 1 | 3 0 7 7 <

01・君だけは知ってた

思えば僕は昔から、ここぞと言う所で怪我をする。

今回も折角、意中の高校へ奨学生という名誉な身分での進学が決まったというのに・・・。

入学式の直前で怪我をして入院とか、呪われているとしか思えない。

病院のベッドで、大きな溜息を吐く。

「う・・・いつ・・・」

途端、胸に激痛が走り、思わず呻いた。

ちよつとつまづいて転んだだけなのに、肋骨が一本と右足が見事にぽつきりいつているらしい。

まあ、この不幸の原因は・・・少し思い当たる節があるけど。

今度は小さく加減して息を吐いた。

と、勢い良く扉が開き、同じ年の頃の子がジッと僕を見つめる。それが誰か、僕には解っていた。

「ふー」

ベッドの上、動けないながら片手を上げると、少し青ざめた表情がぎこちなく崩れる。

「・・・無事、なの？」

「うん。生きてる」

「良かった・・・」

見目にも明らかに安堵し、その場へたり込んだ顔は、男女の違いこそあれど、僕とそっくり同じ。

「翼、心配かけてごめん・・・」

僕の双子の姉、くらもちつば 棕本翼。

「ほんとだよ・・・翔ってば、驚かせないで」

そして、僕はくらもちかげる 棕本翔。

奨学生になるぐらいだから、その実力は折り紙付き。容姿も整っているし、はつきり言って秀才だ。

ただ一つ、運だけはどうにもならないけど。

「でも、これじゃ・・・暫く、学校行けないよね。全く・・・ドジ!」「うっ・・・ごめん、ごめんよ。翼」

涙目での罵声に、僕はただただ、謝るしかなかった。

まさかその後、この目の前の僕と同じ顔をした愛しい半身が、あ

んな目に遭うなんて、思いもよらず。
病院のベッドで、大人しくふせっているしかなかった。

それから数日、僕はひたすらに、問題集を解いて時間を過ごしていた。

正直、入院生活は暇だ。自由が利かないのは身体だけで、僕の頭はよく働く。

ただでさえ、入学早々に学校を休まなくてはならない不利。こうして、独学で勉強せねば、いくら元々、頭の造りが良くても、足下を掬われてしまう。

そんなのは僕のプライドが許さなかった。
それにしても・・・。

「本当に大丈夫なのかなあ・・・」

いくらやむを得ない理由があるといっても、いきなり休学だなんて、奨学生として恩恵を受けながら、あまりに迂闊じゃないかと・・・
取り消しも覚悟してたのに。

母さんが言うには、問題なし、と。

「なんか・・・怪しいんだよなあ・・・」

あの日以来、翼はちっともお見舞いに来てくれないし。

まあ、いくら双子とはいえ、翼には翼の都合があるだろうし、新

たな学校生活に慣れようと必死なのかもしれない。

女子校だつて言つてたなあ。もう友達はできたんだろうか。うまくやれてるといいけど・・・。

女子は男子と違って、付き合いが色々大変だつてきいた。翼はどつちかつていうと、ちよつと変わっている部類に入り、ある意味天然で、厄介なところで気が強かったり・・・今時の女の子と気が合つとは思えない。

考え出すと、どんどん不安になってくる。

はつきり言つて、僕は翼に甘い。たつた二人の姉弟だし、僕にとつて翼は掛け替えのない存在だ。

「うう・・・すごく心配になってきた・・・」

ここで、携帯でも使えれば問題ないのに・・・精密な機器がある病院では、限られた場所でしか使えない。当然、病室はNGだ。

こつこつ時に限つて、母さんは来ないし、誰でもいいから見舞いに来ないかな。

などと手前勝手に思っていると、唐突に、病室のドアが開いた。以心伝心とはこのこと。

期待を込めて、ドアを見てみれば・・・そこにいたのは・・・。

「げっ・・・」

「第一声がそれとは、随分なご挨拶じゃない？シスコン」
「・・・魔女」

不敵に笑み、仁王立ちしている天敵・本条寺真央ほんじょうじまおが居た。

「・・・なにしに来たんだよ」

「病院に一般の人が来る用事といえば、たった一つだと思うけど？」

「僕のお見舞いだって言うのか？一体、どんな魂胆なんだか・・・」

「あんたねえ・・・あたしにどんな偏見持ってるのよ。ほら、これ」

不機嫌に唇を尖らせ、真央は手に持った袋を差し出してきた。

英文字がプリントされたそれは、見覚えのある洋菓子店の名前。

彼女の言葉に偽りはなく、明らかなお見舞い品。

多少、気味悪く思いながら受け取るうと伸ばした手は、しかし、空を切る。

「で？これはどういうことか、ちゃんと説明してくれるかしら」

「説明？見た通りだけど・・・」

「なんで翼じゃなくて、あんたが入院してるのよ。それともなに？

二人仲良く怪我で入院ってわけ？」

「は？」

彼女の言葉は不可解極まりなかった。

怪我をしたのは僕だけで、翼が入院している事実なんてない。なにを勘違いしているんだ・・・この女は。

「なに言ってるんの？入院してるのは僕だけだ。翼は・・・お前と同じ学校に通ってるんだろ」

当たり前のことを言ったはずなのに、真央の眉間に皺が寄る。
翼がどうしているのか、むしろ訊きたいのはこっちだ。

「そっちこそ、なに言ってるの？翼、入学式以来、学校来てないわよ」

「はあ？」

なんだそれ・・・どういうこと？

僕の第六感が嫌な予感を知らせる。

母さんは僕の休学に関して、問題ないと言った。

反面、翼は学校に行っていない。

「・・・なあ、ちょっと頼まれて欲しいことがあるんだけど」

目の前の彼女を頼るのは、本来、屈辱ではあるが背に腹は変えられない。

僕によもやが当たってれば、今、翼はとんでもない状況に身を置いてる可能性がある。

「それって・・・翼に関すること？」

「もちろん」

「んじゃ、頼まれてあげる」

翼に多大な信頼を寄せ、大事に想っている彼女らしく、あっさり引き受けてくれたことが、とても有り難かった。

「僕を携帯使えるエリアに連れてって。母さんにどういふことが、確認する。一応、松葉杖で歩けるけど・・肋骨に響いて、一人だとキツイから、支えてくれると助かる」

「わかった」

コクコクと頷き、真央は傍らの松葉杖を僕の両脇にくぐらせると、文句一つ言わず、身体を支えて歩き出す。

女の子とこんなに密接した経験なんて初めてで、僕は不覚にもドキツとしてしまう。

相手は寄ると触ると敵対姿勢の、あの真央なのに・・。

そういえば・・なぜ、入院してるのが翼じゃないのか？と言った割りに、ドアを開けた先に僕が居たことに驚いてなかったような。

矛盾に気づき、なにより、この近過ぎる距離への照れを誤摩化す意味合いで、僕は訊ねた。

「そっぴゃ・・ベッドの僕を見てもあんまり驚いてなかったみたいな気がするけど、なんで？」

「ん・・なんとなく知ってたから」

「知って？」

「前に言ったでしょ？あたしには見えるって。てか、あれほど言ったのに・・あんた、強い念を飛ばしたでしょ。それで、一時的に守護霊が離れ、翼に憑いた」

不意に真央が至近距離で僕を見上げて来る。

漆黒の瞳は全てを見抜いてるみたいに、妙な威圧感があつて、僕は目を逸らした。

なにより、僕の中の本能が彼女の言っていることを理解していて、言い当てられたことを動揺している。

はぁ・・・と小さく息を吐く彼女。

「だから、大怪我なんてするのよ。いい？滅多なことしなくても、翼にも守護霊が憑いてるし、なによりあたしが傍にいるわ。あんたはもつと自分の身体を大切にしな」

いつもなら、余計なお世話と憎まれ口を叩く場面。

珍しい人物に希少な心配をされたせいかな、僕も珍しく素直に頷いたのだった。

01・君だけは知ってた（後書き）

挿絵は向かって左が翔。右が真央になります。

02・ふとした孤独の隙間に

母さんから呆れた事情を聞き、僕は絶句してしまっ

少しずれてるとは思っていたけれど・・・本当にとんでもない。

どこの世界に男子校に娘を男装させ、息子の替え玉させる親がいるんだ。

そのまま僕は、翼の携帯に電話を掛ける。

『・・・はい、棕本ですが・・・』

多少、声のトーンが低いのが気になったが、それは紛れもなく翼本人の声。

ホッとしながら、言を次ぐ。

「翼？僕だけど・・・無事！？今、母さんから事情聞いて・・・」

と、翼の声の向こう側で見知らぬ者の声が混じる。

母さんの話じゃ、男子校に通っているばかりか、僕が住むはずだった男子寮にまで、翼は身を置いているという。

「え・・・男？まさか・・・寮って個室じゃないの？」

訊ねても返事がない。

僕の中で焦りが広がる。

男と二人でなんて、常識で考えても有り得ない。有ってはならぬ
いだろう。

「どういつことさ！そんなの・・・危険過ぎだろっ。ナニ考えてんの
！？」

と、一瞬の静けさの後・・・。

『うっさい！いっぺんにゴチャゴチャ言われても、こっちは一人な
の！！順番に答えるから、少し待ちなさいっ！！』

翼がキレた。

こうなつては、大人しく翼のタイミングに合わせるしかない。電
話を切られでもしたらそれこそ、本末転倒だ。

ボソボソと話す声が聞こえる。

僕は辛抱強く待った。

そして・・・。

『もしもし？かけ あんた、大丈夫なの？怪我の具合は？』

声を潜めながら、僕の身を案じる言葉を投げかけてくる翼。

もう・・・人を心配してる場合じゃないでしょ。そっちのがよっぽ
ど危険だつてのに。

「怪我は・・・まあ、骨折ってるわけだし、すぐに治るはずもないけど。って、僕のこととはどうでもいいんだよ。翼、なんで替え玉なんて・・・そこがどういいうとこか解ってるの？」

「・・・解ってるよ。男子校でしょ。」

解ってるんなら、なんで断らないんだよ。
イライラが募る。

「そう！男子校！！男しかいないんだよ！？僕に成り済まして飛び込むなんて、無謀過ぎ！バレたらどうするの？どんな目に遭うか・・・助けなんて期待できないだろ！今すぐ、家に帰れ！！」

「翔・・・」

翼の声が力を失い、申し訳なさそうな響きに变化したのは一瞬で。

「でも、そんなことしたら、入学取消されちゃうよ。折角、こんないいところに推薦で入れたつてのに、勿体ない。入りたかったんでしょ？すつごい、喜んでたじゃん」

痛い所を突いて来る。

無邪気に喜んだ過去の自分の、なんと迂闊なこと。悔いても、それは消せない。

今はとにかく、翼を思いとどまらせることが先決だ。

「それは・・・けど・・・翼だって学校あるのに・・・初っぱな休んでたら、後々大変になるだろ？なにより・・・僕のせいで翼を危険な目に遭わせるの、嫌だ・・・」

そうだよ。翼だって楽しみにしてたじゃないか。可愛い制服が着れるって、女子高生らしく楽しむんだって喜んでただろ？

なにが悲しくて、僕の代わりに男子校なんか・・・。

母さんの理解不能な思考は今に始まった事じゃないけど、これはやり過ぎだ。

「私だって、翔が学校通えないなんて嫌だよ。だから、力になれることはなりたい。一ヶ月の辛抱だし、大丈夫だよ」

優しい・・・声だった。

反面、揺るぎない気配が伺えて。

「翼・・・」

「それにさ、私、結構、演技うまいかも。早速、先輩方に気に入られちゃったよ。あと、学校に変わりないから、勉強面でも出遅れることないし・・・うん。思ったほど、深刻な問題じゃないわ」

明るい物言いは、僕に対する気遣いと己を言い聞かせるための暗示なのが解って、それ以上、なにも言えなくなってしまう。

僕に言われるまでもなく、身の危険を感じているだろうし、たった一人で心細い想いを抱えているに違いない。

それでも・・・翼は僕のために頑張ってくれているんだ。

『翔は身体を治すことだけ考えな。ね？早く治れば、私の替え玉期間も短くなるんだから、心配なら死ぬ気で治しなさい』

そう、翼の想いに応えるには、それしかない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・わかった」

迷いに迷って、大きく頷く。

もちろん、快くというわけじゃない。僕は慌てて言葉を重ねた。

「でも・・・無理すんなよな？」

『うん、ありがとう』

「また連絡するから」

『あー・・・できれば、メールにして。電話だと・・・ちよい同室の子が厄介。あと名前も別のに・・・翼って呼ばないでね』

同室の子・・・さつきから向こう側で翼と話してるヤツか。

一緒に居てバテてないあたり、かなり鈍感かもしれないけど・・・
要注意だ。

「・・・わかった。そいつ、くれぐれも気をつけるよ」
『はいはい。それじゃ、切るね。お大事に』

慌ただしく電話が切れ、僕の口からは長い長い溜息が漏れる。
なんとなく押し切られた感が強いけど、これで本当に良かったんだらうか・・・。

「はー・・・翼も無茶するわねえ」

真横からの声に、僕はギョツとしてそちらを向いた。
存在をすっかり忘れていたが、僕には連れがいたんだった・・・。
他でもなく、一人では動けない僕を支え、翼に電話出来る状況へと導いてくれた、ある意味の恩人である彼女は、僕の携帯に耳を寄せ、全てを聞いていたようだ。

「・・・おい、盗み聞きなんて、趣味悪いぞ」

恩はあれど、プライベートな会話を聞かれたことに腹を立てた僕は、早速と睨みつける。

が、目の前の彼女はどこまでも涼しい表情で。

「それが恩人に向かって言う言葉かしら？なんだったら、このままここに置き去りにしてもいいのよ」

「ぐ・・・」

それは困る・・・。

「ほうらほうら、どうなの？それが嫌なら、素直に『お願いします、真央さん』って言いなさいよ」

こいつ・・・人の足下見やがって。

睨みを利かせてもどこ吹く風。諦めて、小さな声で言う。

「・・・オネガイシマス・・・真央サン」

「よし。んじゃ、戻るわよ」

嫌みなくらいニツコリ微笑み・・・真央は、僕を支えて歩き出した。
くそう・・・嫌なヤツだ。

それでも頼るしかない現状が情けない。

これはもう、翼の言う通り、全力で怪我を治すしか・・・。

と、そこで、違和感に気づく。

そういえば、なぜ真央は黙って僕らの会話を聞いていたんだ？自分こそがと、電話口に出ても不思議はないのに、なんで大人しくしていたんだろう。

「なあ、どうして翼と話しなかったんだ？」

するりと口を割って出た質問に、真央の歩みが止まる。
彼女は真っ直ぐ前を見据えたまま、答えた。

「・・・翼があたしを望まなかったから」

それは初めて見る寂し気な横顔。

僕は必要以上に動揺してしまったのか、からかつ言葉すら思い浮かばず、再び歩き出した彼女の意に従う。

完全に、虚を突かれた。

こんな顔をする真央を、僕は知らない。僕の中で真央は小憎たらしい・・・口喧嘩の相手でしかなくて、厄介者でしかないのに。

その表情は強く僕の中に残ったんだ。

03・あえて言うなら友愛？

それから、僕の病室には決まった時間、決まった人物が見舞いに訪れる様になった。

毎度、きちんと思舞いの品を手に、きっちり二時間ほど時間を潰し、帰ってゆく彼女。

その真意は、一体なんなのだろう。

「あ、コレ、白あんじゃない。そっちがカスタードだったか・・・。シスコン、チェンジ」

ぱっくりとお腹部分を割った状態のタイヤキを差し出し、彼女が交換を迫る。

今日のお見舞い品はタイヤキらしい。四つの内の二つをそれぞれ手にしている状態。

僕は男にしては、甘いものもイける口で、更に言えばカスタードは好きだ。

「えー・・・僕もカスタードがいいんだけど・・・」

不満たっぷりにそう言うと、彼女・・・真央の眉間にグツと皺が寄る。

「なによ、買って来たのはあたしよ？文句言うなら、あげない」

「・・・なんだよ、その横暴。だったら、買って来なきゃいいじゃん」
「あたしが食べたかったの！もう・・・じゃあ、こっぴどくしましょ」

手に持ったカスタード入りタイヤキは、素早く彼女に奪われ、あつという間にまっぷたつ。四つ全部がそんな状態になって・・・半欠けなそれらが差し戻された。

「・・・なにこれ」

「半分こ。これなら公平でしょ？」

首を傾げる僕に、真央は手にしたカスタード入りのタイヤキを食しながら、やれやれと肩を竦める。

僕の我が儘を叶えてやった。とても言いたげな態度にカチンと来たものの、冷めて行くタイヤキを目の当たりに、慌ててかぶりつく。買って来た人物はともかく、タイヤキは甘すぎず、とても美味しい。

つか、そうじゃなくて・・・。

「あのさー、なんで来るわけ？」

「は？」

「だから、見舞い」

もぐもぐと口を動かしながら、僕は疑問をそのままぶつけた。だって、本当に真央が欠かさず見舞いに来る理由が解らない。母さんに頼まれた？

いや、その可能性は低い。入院しているのが翼ならともかく、僕と彼女に深い繋がりなどないのだから。

真央はタイヤキに視線を落としたまま、素っ気なく言った。

「別に・・・暇だから」

完結なようで、不可解が残る答え。

「暇って・・・折角の放課後。女子高生なら、色々あるだろ？友達と買い物とか、お茶とか」

一般的な過ごし方を例に挙げ、僕はジッと真央を見つめる。いくら翼がいないからって、他に友達はあるだろう。

わざわざ虫の好かない相手の元へ来て、ともすれば気分悪く時間を過ごす必要はないと思えた。

真央はそれには答えず、ひたすらにタイヤキを食べ進める。

「・・・冷めるよ」

視線を合わせないままポツリ言われ、僕も言葉なく、タイヤキを食べた。

白あん、カスタード、あんこ、チーズ・・・四種全部を食べ終わり、とりあえずは満足。

が、やはり気になるのは真央の動向。

ちらつと彼女を見れば、僕を真っ直ぐ見つめる黒い瞳とぶつかる。

「な、なんだよ」

まさか見られてたなんて思わなくて、僕はとっさに機嫌悪く返す。
真央の視線を感じながら、けど、再び視線を合わせるのは照れくさくて、そっぽを向く。

「早く傷治したい？」

言われ、なにを馬鹿なと思った。

「当たり前だろ？盗み聞いてた通り、翼は僕の代わりに男装して、男子校通ってただよ。しかも、男と同室で寮暮らしまで・・・早く動ける様になって、入れ替わらないと危険だ」

「・・・そうね。あたしとしても、翼には早く戻って貰いたい」

同意する彼女の声は・・・気のせいかな、沈んでいる様に思える。
いつも一緒にいる相手がいないんだ。

“魔女”と称されるほど、胡散臭く侮れない存在であっても、普通に寂しい気持ちは持ち合わせているのかもしれない。

「協力するよ。あたしの能力を使って、あんたを一日でも早く、動

ける様にしてあげる。だから・・脱げ」

「は？」

「上着脱いで」

啞然とする僕の上着に手を掛け、真央は表情一つ変えずにどんどんボタンを外して行く。

なにがなんだか解らないまま、前をはだけられると、自分で言うのもなんだけど、見目にも痛々しく包帯が巻かれた胸部が露になった。

「・・・痛そうね」

「・・・痛いよ。肋骨折れてるんだか・・・って、オイ。なにして・・・」

胸部に置かれた白い手が、僕の制止を無視して包帯を剥ぎ取る。

なにがしたいんだ・・・コイツ。

正気の沙汰とは思えない行動に、僕はただただ啞然と・・・情けなくも、呆然と彼女のなすがままを見送った。

ほどなく、素肌を晒す形となり、ひやりとした掌が宛てがわれる。

「あなたの守護霊の力を借りるわよ。あたしが上手くコントロールして、折れた肋骨くつつけてあげる」

「は？え・・・ちょ・・・う！」

そう、言った次の瞬間、冷たかった掌がどんどん温度を上げ、熱い鉄の塊でも押し付けられているかのごとく、ものすごい熱を持つ。

「・・・あつっ・・・ま、まお・・・っ!?!?」

耐えきれず、苦痛の声を漏らす。

脂汗が滲み、耐えきれなくなる一歩手前で、フツとそれが離れた。僕は弾かれたように起き上がり、胸を押さえ、彼女を睨みつける。

「っ・・・のお・・・痛いじゃないか!なにするんだよ!?!」

「痛い?そんなはずないと思うけど」

「痛いに決まってるだろ!火傷するかと思っ・・・あれ・・・?」

非難囂々、文句を並べ立て・・・気づいた。

真央が指しているのは、つまり、折れた肋骨の・・・胸の痛みで、確かにそれはない。

「・・・痛く、ない・・・」

「治したからね」

「治したって・・・」

さらりととんでもないことを言う彼女を前に、僕は開いた口が塞がらなかつた。

ただ者じゃないとは思っていたけど・・・。

そもそも、僕がなぜ、真央を“魔女”と呼ぶのか・・・それには深い理由があった。

あれは忘れもしない、中学一年の時。

翼が真央を家に連れて来た初対面で、彼女は僕を見るなり言ったんだ。

「あんだ・・・もの凄い量、憑かれてる。稀に見る霊媒体質のようね」

一瞬、言われた意味が全く解らなかった。

僕はその手の類いを信じていなかったし・・・ただ、身体が重くて、日々、ダルイのは事実で。

なおも彼女は続ける。

「あたしが全部被つてあげる。んで、力ある守護霊様喚んであげてから・・・感謝しなさいよ」

「はあ？」

次の瞬間、真央の容赦ない平手が僕の右頬を思いつきり打った。

「いつてえ・・・なにす・・・っ！」

かと思えば、グッと引き寄せられ、抱きしめられて。

艶やかな黒髪からふんわり香るシャンプーの香り。男の身体とは違う、柔らかな感触・頬を叩かれた理不尽も忘れ、ボーッとしました。

そんな僕の背を、トントンと二回叩いて、彼女は身を退く。状況を全く飲み込めずにいる僕に、真央は小さく笑った。

「男にビンタなんて、滅多に出来ないから・・スツキリ」

言葉の意味をじわじわ理解して、当然、僕は怒る。

「おま・・ふざけんな！翼っ・・誰だよコイツ！！初対面でなんでぶん殴られなきゃならないの？ワケ解んないよ！」

「あー・・この子は、本条寺真央ちゃん。真央ちゃんはね、こう見えて、有名なお寺の子ですごく霊感強いよ。翔、肩が重い重いつて言ってたじゃない？相談したら・・憑かれてるんじゃないかって来てくれたんだけど・・」

僕の赤くなっているであろう右頬に視線を這わせた翼は、苦笑した。

有名な寺の・・？霊感が強い？確かに・・肩は軽くなってるし、ダルさもなくなってるけど・・それをこの目の前の女がやったっていうのか？

僕はとても信じられなくて、疑いの目を向ける。

と、なにを思ったのか、真央は翼の両目を手で覆い、視界を塞ぐ。

「疑うなら、視ればいい。あんたは稀に見る霊媒体質だから、視よ

うと思えば、視えるよ」

「なんだよ、それ。馬鹿らしい。僕はそんなの信じない」

否定する言葉を吐く口は、そのままの形で固まることになる。

軽く瞬きをした後の視界に、彼女の言う通り、視えないはずのモノが視えたから・・・。

あまりに衝撃的な光景に、僕はそのまま、その場で倒れた。視界の端で、真央はにやりと意地悪く笑っていて・・・そのとき、僕は思ったんだ。

“魔女”と。

それ以来、そういうモノを視ることはなかったけど、僕がそういう類いを信じる様になったのは言うまでもない。

アレは本当に、視て気持ちのいいもんじゃない・・・。

反面、僕は密かに真央に一目置いていたりする。

だって、彼女には常人にはない特別な能力があるんだぞ？それは、どう頑張っても手に入れることができない、生まれつきの奇跡。

僕みたいに、誰もが知り得ることのできる常識を有する、世間の枠に捕われた存在とは違う。その部分は素直に尊敬に値すると思う。もちろん、本人にそんなことは口が裂けても言えないけど。凶に乗られるの、眼に見えるし。

「回想は終わったかしら？だったら、早く、服、着なさいよ」

不機嫌に差し出された上着を受け取り、彼女を見れば、居心地悪そうに顔を赤らめている。自分が脱がしておいて、なに、今更、恥ずかしかつてるんだよ・・・。

真央は全くをもつて理解不能だ。
受け取った上着を着込み、改めて、胸をさすってみる。痛みはなくなつたものの・・あれ？なんか、目眩が・・。
くらくらと景色が歪み、僕はそのまま背後に倒れた。
急速に身体の力が抜けていく。
なんでだ？

「言ったでしょ。あなたの守護霊の力を借りるって。当然、宿主にも負担は掛かるわよ」

僕を覗き込む真央の瞳が、呆れた様に細まって、大きな溜息をついた。

んなの、知るか・・。もっと早く言えっつての。

「さて・・あんたもゆっくり休みたいたろうし、あたしも疲れたから帰るわね」

フツと視界から消える黒髪。首を巡らし、彼女の姿を追ってみると、どこか足下が心許なくふらついていることに気づく。

“当然、宿主にも負担は掛かる”・・この言葉は、僕だけではなく、不可思議な能力を使った真央にも当て嵌まるということか。
なぜそこまでして、僕の傷を治してくれたんだろう。

まあ、大半は翼を一日でも早く、今の危険な状況から解放するためだろっけど・・。

それでも、少なからず、僕のために彼女は無理をしたんだ。

「・・・ありがと。気をつけて帰れよな」

自然にそんな言葉が口を突いて出て、華奢な背中が振り返る。

真央は言葉なく、ただやんわり微笑み、そのまま病室を後にした。その笑顔は初めて見る穏やかなもので、僕は不覚にも見惚れてしまい、誰もいなくなった部屋の中、一人で顔を赤くして俯く。

あんな表情、反則じゃないか・・・。

真央は黙っていれば、美人なんだ。今時珍しく、染まっていない黒髪は艶やかでサラサラで、色は白いし、目もぱっちりとして・・・。

「って・・・なに褒めてんだよ・・・“魔女”なのに」

僕にとって、真央はいけ好かないヤツで、つまらない口喧嘩の相手。特別な感情なんてそこにはなくて、翼が絡むと、ちよっただけ協力的になるだけで・・・。

それだけの関係のはず・・・なんだ。

04・ホントは泣かないはずだった

翌日、真央はお見舞いに来なかった。

次の日も、その次の日も、来客のない毎日。

どうしたんだろう・・・なにかあったのか？

それとも、無理が祟って体調崩したとか・・・ありうる。

「棕本くん、診察するよ」

「あ、ハイ」

悶々と悩みは尽きないものの、僕の現実は病人でしかない。

あの後、早過ぎる胸の傷の完治について、主治医はひたすらに首を捻って、自分の見立てが間違っていたという結論に達し、ひどく落ち込んでいた。

ごめん、先生。

まさか、守護霊の力と真央の霊力で治しました。なんて言えるはずもなく、診察ミスを謝罪する先生に、多大な罪悪感。

そうとは知らない先生は、それを埋めようとするかのように、右足の治療に熱を入れてくれて、僕もリハビリをすごく頑張って、杖をつきながらではあったけど、病院の外を散歩出来るぐらいには回復できた。

そして、五日目の夕方、彼女はひょっこりと現れる。

「だいぶ元気そーじゃない」

「魔女・・・」

あの日見た柔かな笑顔はどこへやら、変わらない不敵な表情。
僕は少しがっかりすると同時に、安堵した。

「その言葉、そっくりそのまま返すよ。元気そーじゃないか」

「あたしはいつでも元気よ」

そう言っつて、目の前に差し出されたのは・・・毎度おなじみ、お見舞い品の甘味。

律儀だなあ。

受け取りながら、苦笑う。

今日の見舞い品は、どら焼きらしい。

「で？ホントのところ、どうしたんだよ。あんなに毎日欠かさず来てたのにさ」

「・・・別に。あたしにだって、都合はあるわよ」

涼しい表情でどら焼きを食べる彼女。

でも、よくよく見てみると、どこか疲れてるような気落ちした感じが伺える。

やっぱ、アレのせいで具合悪くなったのかな。

真央の性格上、それを素直に言うとは思えない。

「なによ、あたしの顔になにかついてんの？」

ジロジロ見つめる目に気づいた彼女は、不機嫌に眉を顰め、僕を睨みつける。

黙ってれば美人なのに、口の中いっぱいにとら焼きを頬張る姿はまるで子供。人からどう見られてようが気にしてない雰囲気、実に真央らしい。

くくつと小さく笑うと、ますます彼女は不機嫌になった。

「なに笑ってんのよ。シスコンのくせに・・・生意気」

「シスコンは関係ないだろ。つか、そんなに腹減ってたわけ？昼飯とか、ちゃんと喰ってんの」

「・・・」

何気なく訊ねたそれに、真央の手が止まる。

あれ・・・僕、そんなに変なこと言った？

彼女はゆっくり口の中のを噛み砕き、飲み込んで、視線を落とす。

「別に・・・今日は、お昼食べ損ねただけ」

同じ言葉にピンと来た。

真央はなにかを隠している。そして、それは決して彼女に良い状

況じゃない。

僕だつて人並みに相手を労る気持ちはある。

まして、真央は翼が絶対的な信頼を置いている親友。本気で嫌いになんてなれるはずない。

でも、彼女は僕の余計な慰めなんて要らないだろう。口喧嘩相手が急に優しくなったらなつたで、自分の弱さを見透かされたことにプライドが傷つくに違いない。

となれば・・・普段通りが一番なのか。

特に為す術もなく、堂々巡りであることに気づき、僕は再び小さく笑う。

「あんだ・・・ホントになんなのよ。気色悪い」

「気色悪い？すつげー、失礼だな」

「黙つてどら焼き食べながらニヤニヤされたら、気色悪いって思ふのが普通でしょ？」

「ニヤニヤなんてしてない。だいたい、魔女だつてがつついてたじやん」

「がつついてたなんて、乙女に言う言葉？」

「乙女？乙女ねえ・・・どこにそんな慎ましやかな女の子がいるんだか。紹介して欲しいもんだね」

「あんたの目は節穴？目の前にいるじゃない。大和撫子が」

「ぶつ・・・自分で大和撫子とか、どうよ？つか・・・まだ、がつつき過ぎ。口の周り、クリームついてるし。ガキかよ」

真央が買つて来たどら焼きには、あんどだけじゃなく、生クリームも入った特別仕様。

指摘され、彼女は慌てて唇の端を拭くと、指についたクリームを舐めた。

あ、その仕草は・・・ちょっと、アレだなあ・・・。
子供じみたそれは、普段の彼女の印象と違い過ぎてて、なんだか
妙に新鮮で笑ってしまっ。

「こづいづのは取り繕って食べたって美味しくないのよ！いつも翼
と大口開けて食べてるし」

ああ、納得。

翼もその手のお上品さは持ち合わせていないもんな。

翼・・・翼か。今頃、どうしてるのかな？何事もなければいいんだ
けど。

「・・・大丈夫よ」

不意に真央の声が真剣味を帯び、そんなことを言う。

「翼なら・・・大丈夫」

「え？」

「もうすぐ、終わるから」

まるで僕の心配を見抜いたような口ぶり。いや、彼女には解るん
だろう。

普通の人は持ち合わせていない、不思議な能力の持ち主だから・・・
きつと、なにもかもお見通しで、なにに対しても冷静。

僕は真央をそんな風に過大評価していた。

様子がおかしいことに、気づいていたのに・・・彼女が見かけ通り、クールなプライドの高いしつかり者だと思っていたんだ。

けど、実際は　。

それから、真央はまた以前のようにお見舞いに来るようになった。ただ、日に日にどこか虚ろで、元気がないように見えて、だけど、口は達者で。

僕はそれが単に、体調が回復してないだけだと思っていた。

だったら、無理して来なくても、こっちは全然構わないのに・・・真央の行動の矛盾に、なぜか、イライラが募る。

そして、それは、唐突に爆発した。

「しっかし・・・いつ来ても寂しいね。見舞いに来てくれる友達の人や二人、いないわけ？あたしが来なきや、閑古鳥ね」

言われ、カチンとくる。

だって、仕方ないじゃないか。僕はまだ、新しい学校に一度も行ってないんだから、友達なんているはずがない。

まして、中学の友達は・・・上辺だけの付き合いだった。優秀なノートだけが頼りで、僕の性格や人柄なんて見てない。

そうさ。僕はそういう寂しい環境で過ごしてきた、クラスに必ず一人はいる浮いた存在である優等生。

真央の言葉は、まさに琴線だった。

「うるさいな。別に頼んで来てもらってるわけじゃないし、嫌なら来なきゃいいだろ？ だいたい、毎日、特に用もないのに来て、悪態ばっかでこっちが疲れるんだよ。迷惑なの、わかんないわけ？ さっさと、帰れよ！！」

言うてから、しまったと思う。

いくらなんでも、これは言い過ぎた・・・。

でも、真央だから・・・クールで気が強い彼女なら、これくらい言ってもダメージを受けない。

きつと、大丈夫だって・・・。

「・・・え」

見た瞬間、僕は完全に固まった。

頭が真っ白になって、どうしたらいいのか、なにも考えられない。だって、目の前で真央は・・・。

「・・・っ・・・」

・・・泣いていた。

グツと拳を握り、唇を噛み締めて、その綺麗な形の目から大粒の涙をこぼして。

泣いていたんだ。

彼女の涙を見たのは初めてで、僕はとにかく動揺した。

そして、それが、悔しいとか、怒ってるとか、そういう種類の涙

じゃないことが解って、苦い気持ちが広がる。

どうフオローしていいか解らない僕を尻目に、真央はゆっくりと手の甲で涙を拭き、無言で背を向け、ドアを開けて・・・出て行ってしまった。

決して広くはない華奢な背中が、完全に僕を拒絶していて、引き止めることはもちろん、言葉をかけることすら躊躇われ。そのまま見送る。

残された僕が出来たことはただ一つ。

ただ、愕然と、した。

僕が真央を泣かせた・・・。

泣くはずのない、強いはずの彼女を・・・そう見誤って。

僕は傷つけたんだ。

でも・・・。

どうして、真央は傷ついた？

僕が言ったことは、確かに、決して好意的な言葉ではなかったにしても・・・それは、日常的な口喧嘩ととれる範疇じゃなかったのか？

今日に限って、なぜ彼女は泣くほど、傷ついたんだろう・・・。

傷つけたという自覚はあっても、その原因は、今の僕には見当もつかなかった。

また、明日、顔を出したら・・・素直に謝って訊いてみよう。

だけど、翌日、真央は来なかった。

次の日も、次の日も・・・まるで、先日の再来だ。

それほどに僕は彼女を傷つけてしまったということなのか・・・。そのもやもやを少しでも忘れるため、リハビリに打ち込む。

そして、彼女が顔を出さないまま、僕に退院許可が降りたのだった。

05・どこかに灯るかすかな温もり

『喜べ！死ぬ気で頑張って、明日、退院出来ることになった。今まで、ありがとな。明後日、入れ替えしよう。お互い、元に戻るんだ
by弟』

真央のことは気になったけど、これが目標だったのだからと、僕は早々に翼へメールを入れた。

僕の身代わりをしている実姉からの返事は、すぐに返される。

『おめでとう。うん、分かった。明後日だね？荷物とか纏めておくから・・入れ替えは夜にしよう。時間決まったらメールするね』

これで、僕と翼の間違った生活は終わりを告げるだろう。

あとの問題はやはり・・彼女。メルアドも携帯番号も知ってたけど、さすがに、電話で直接話す気にはなれなかった。

どうしても、真央の泣き顔がちらついて・・僕はメールに逃げた。

『明日、退院出来ることになった。その・・この前は、ごめん。いつものモノリだったんだけど・・言葉が過ぎたかもしれない。ホントに悪かった by翔』

送信して、改めて文章を目で追い、溜息。

真央は返事をくれるだろうか・・。

フリップを開いたままぼんやり思っていると、手の中で携帯が震

えた。メールの着信を知らせるアイコンが点滅していて・・・僕は恐る恐るそれを開く。

『明日、行く』

たったそれだけの文章。一言と言っていいほどに短いそれ。

まだ、怒ってるんじゃないか、身体の具合は大丈夫なのか、心配事は尽きない。

けれど、僕の心は一気に晴れ渡った。

真央、来てくれるんだ・・・。

ただ、その事実がなによりも嬉しかったんだ。

退院当日。

母親はどうしても手が離せない用事があるから来られないのとことで、僕は身支度を整え、一人で退院の手続きを取って、短くも慣れ親しんだ病室を後にする。

真央とは正面入り口・受付窓口の横で落ち合うことになっていた。本当は・・・病室で少し話をして、と考えていたけど、病院側としてはそう悠長に待っていられないらしく、すでに僕のベッドは使用者が決まっているらしい。

やんわりとではあったけど、早々に退去して欲しいと看護婦さんに言われてしまったのは、居座るわけにもいかなかった。

備え付けのソファに腰掛け、松葉杖を身体の横に置き、小さく溜息を吐く。

現在の時刻は・・・三時半。

彼女はいつも学校帰りに見舞いに来てくれるらしく、制服姿で三

時半過ぎに姿を現すのが定石だった。

「そろそろかなあ・・・」

ぼんやり正面玄関の自動ドアを見つめ、思う。

とりあえず・・・来たら、ちゃんと言葉で謝って・・・そして。

「あーでも・・・なんで泣いたの？なんて訊けないよなあ・・・」

原因を知りたいのは山々なのに、正面切って訊くのはなんだか、ちよつと・・・と思えて来た。謝ったその口で理由を訊くのはもちろん、間抜けだと思っし、なにより、そのことでまた真央が傷ついたら・・・。

正直、僕は彼女の扱いに困り始めていた。

今までは、ただ、生意気な口喧嘩相手ではない・・・それこそ、なにを言っても大丈夫な男友達みたいに錯覚していた真央は・・・異性だ。

僕と違って、繊細に弱い部分を持ち合わせた・・・女の子。

・・・参った。

真央が来てくれることを素直に嬉しいと思う、どこか温かな気持ちがある反面、彼女に逢ってどんな態度を取るのが一番いいのか、困る気持ちが半分、僕は頭を抱えて唸ることしかできない。

時間は刻一刻と過ぎ、真央がいつ来てもおかしくないリミットだというのに、こんな状態で大丈夫なんだろうか・・・。

「それにしても・・・遅いな」

悩みは尽きず、軽く時間の経過を忘れるくらい意識が内側に向いてしまっていた僕だったが、ふと、現実に戻って時計の針を目の当たりに、首を傾げた。

時間はすでに四時を過ぎ、真央を待ち始めて一時間ぐらいが経過している。携帯を取り出して見ても、彼女からの着信はない。

おかしいな・・・なにか、遭ったのか？

途端に心配になり、迷いに迷った挙げ句、真央の携帯番号をプッシュしようとした、まさにその瞬間。

「君が・・・棕本翔、くん？」

「は？」

名前を呼ばれ、顔を上げると見知らぬ長身の男が僕を見下ろしていた。年の頃は、僕よりも年上だろうけど、たぶん高校生。

ていうか、誰だ・・・？

僕より遥かに高い目線と、なにより、全く面識のない初めて見る顔という警戒心から、視線が尖ってしまうのは不可抗力だろう。

「あー・・・別に怪しい者ってわけじゃ・・・。俺、ほんじょうじつかさ本条寺司つかさって言うんだ。解る、よね？」

「本条寺・・・って」

「そう。真央の・・・兄」

自己紹介されたからというわけじゃないけど・・・そう、よくよく見れば、目の前の顔はどことなく真央に似ていた。
慌てて、小さく会釈する。

「初めまして。棕本翔です。こちらこそ、姉の翼が世話になつて・・・いや、もちろん、僕もだけど・・・お見舞いとか、真央・・・さんには、頻繁に来てもらって・・・すみませんでした」

「俺相手に畏まらなくてもいいよ。だいたい、年、一個しか違わないだろ？それに・・・真央は自分の意思で来てたわけだから、謝るのは筋違い。気にするなっつて」
「はあ・・・」

さばさばとした物言いはやはり真央に似ていて・・・というか、肝心の彼女は？

ちらりと視線を外に向けたのに気づいたのか、彼はすぐに言を次ぐ。

「ああ、真央は来てない。だから、代わりに俺が来たんだ」
「え？」

「あいつ、大熱出して寝込んでるんだよね。数日前からずっと体調崩してて、それでも無理に学校行って、余計悪くなつて・・・ほとんどは精神的なことが原因らしいんだけどさ」
「精神的なこと・・・」

一気に血の気が退いた。真央が寝込むほどショックを受けた原因、それはきつと僕の心ない言葉だ。

僕は自分が考えていた以上に、手酷く彼女を傷つけていたのか？

「・・・真央は・・・大丈夫なんですか・・・？」

「うん。薬飲んで大人しく寝てれば、大事に至るほど深刻じゃない。ただ、どうしてもココへ来るって言いつ張ってね。さすがにそれは・・・ってことで、俺が代理で来たわけ」

「そう、ですか・・・」

無理してまで来て、僕に文句の一つも言いたかったってところだろう。

それほどに、彼女は僕に腹を立てているんだ。

ということは、兄だという目の前の彼の目的は　。

「　解りました。殴りたいなら・・・どうぞ。僕が真央を傷つけてしまったのは事実だし、気の済むまで責めてくれて構いません」

「君は・・・妹を傷つけた自覚があるの？」

「・・・正直、解りません。僕はいつもの軽口のもりだったから、なぜ、彼女がああ時に限って、泣いたのか・・・。あんな真央を見たのは初めてで・・・」

「真央が、泣いた？」

「・・・泣きました」

「そっか・・・」

小さく溜息を吐いた真央のお兄さんは、ただ、困ったように頭を掻く。

彼自身も戸惑ってるみたいなの雰囲気、僕は恐る恐る訊ねる。

「あの・司さんは、僕を責めに来たんじゃない？」

「ん？いや、俺はただ・真央が一目置く人物とやらを見ておきたかっただけ」

「あの、意味が・・・」

「うちの妹が普通じゃないのは知ってるんだろ？」

見据えてくる彼女と似た瞳が、真つ直ぐにその実を口に、僕の答えを待つ。

「真央が類似稀なる霊能者であること、ですね。知ってます。実際、僕もそれで助けられたし・・・視ましたから」

「うん、そうらしいね。視せたら倒れて面白かったって、楽しそうに話してた」

楽しそうにつて・・・あの一件は僕にとって、トラウマなのに。意識せず、眉間に寄ってしまった不機嫌な縦皺を自覚し、慌てて普通を装った。

が、一連の動作は全て、彼に見られていて、笑われてしまう。

「まあ、棕本くんにとっては災難でしかなかっただろうけど・・・真央にとつて、君の存在は救いなんだろうなあ」

「僕が・・・救い？まさか、そんなわけ・・・」

「俺は本条寺の長男だけど、そういう能力は一切なくてね。特異な能力を持つことで、どんな苦悩や葛藤があるか、真に理解すること

はできない。血を分けた妹だし、力になってやりたいと思っても、所詮、上辺だけの慰めや励まししか、できないんだ」

少し寂し気に顔を歪め、首を振る。

僕が見る限り、真央は不敵で強靱で、高嶺の華のように孤高で・・弱い部分なんてないように思っていた。

そう、あの日、彼女の涙を見るまでは・・。

「でも・・僕だって、心ない言葉を吐いて彼女を傷つけてしまった・・」

「例え、君の軽口に傷ついた事実があつたとしても、真央にとって、棕本くんは良い意味で特別だから　大丈夫」

真央にとって、僕は・・特別？

「だからさ、できれば・・今まで通り、普通に接してやってくれな
いか？」

「・・・・・解りました」

懇願してくる彼に、僕は大きく頷いた。

僕の中に、今までとは違うかすかな温もりが灯った瞬間だった。

自分が彼女の特別であることに高揚感を抱いて・・その日、僕は僕が本来、在るべき場所へ、双子の姉と正しい入れ替えを果たす。

この時の僕は目先のことに捕われていて、最も近い半身の様子が少しおかしいことに気づかなかつた。

そう、翼の身に取り返しをつかないとんでもないことが起こつて
いたことを、僕はまだ知らない。

そして・・・その事実は他でもなく、当事者より知らされること
になる。

06・同じスピードで

病院のベッドとは違う、温かな身内の香りに包まれて、僕は眠っていた。

誰かが、肩を揺すっている。ゆっくり浮上する意識。

「・・・翼、そろそろ起きへんと、学校遅刻してまうよ。せやけど・・・身体辛いんやったら、休む？」

聞き覚えのある声が、そう僕に声を掛けて来る。

「男は平気やけど、女の子の初めては痛いだけやもんな・・・無理せんでええから」

僕の反応を待たずに言い連ねる彼の言葉が引つ掛かった。

身体が辛い・・・女の子の・・・初めて？つか、僕のこと、“翼”って・・・

その可能性に、一瞬にして目が覚めた。バネ仕掛けの人形のよう
に勢い良く起き上がった僕は、心配気に覗き込むその胸倉を掴む。

「おい、お前！翼に・・・なにしたんだよ！！」

「へ？あれ・・・翼じゃ・・・ない・・・？もしかして、本物の“翔”？」

「・・・ああ。僕が真正正銘、椋本翔だ」
「・・・ほんまや。胸ない・・・」

大きな手のひらを僕の胸板に当て、膨らみがないことを実感したのか、目の前の男は半ば呆然と呟いた。

つか、その確かめ方ってどうなんだよ・・・。

「いつの間に・・・入れ替わったん・・・？翼は・・・実家に帰ったんか・・・」

「昨晚に・・・てか、僕の質問に答えてない。お前、僕らが入れ替わってたこと、知ってたのか？翼に、妙なことしたんじゃないだろうな」

「・・・お前”やない。俺の名は小笠原空夜おがさわらくへいじやや。同室やし、これから付き合い長くなるんやから・・・姉弟共々、仲良うしてや」
「姉弟共々・・・？」

意味深な言い回しに、僕は眉を顰めて彼　小笠原空夜を見つめた。

やんわりと微笑む顔は不敵で、なのに、どこか翳りが見え、寂し気。矛盾が垣間見えるその理由は、やはり、僕の双子の姉にあるのだろうか。

「仲良くして欲しいなら、あったこと全部、包み隠さず話してもらおうか」

「・・・そのつもりや。俺も色々、思うところあるしな・・・腹割って話そ」

「望むところだ」

そして、僕は翼がここでどんな風に過ごして来たのか、ルームメイトである目の前の彼となにがあったのか、一部始終を知ることになる。

僕が考えていた以上に、本当に色々なことがあったようで・・・けれど、翼は一言もそれを明かしてくれなかった。怪我をして入院している弟に、余計な心配を掛けたくなかった、という理由ではないだろう。

『・・・翼があたしを望まなかったから』

ふと、脳裏に鮮明に蘇る彼女の言葉。

ああ・・・そういうことなんだ。

同じ血を分けた肉親で、半身たる双子でも、僕たちは別の人間。翼には翼の世界があり、その全てに僕が存在し、関わることなどできはしない。

寂しいけど、それが現実なんだ・・・。

僕は今になって、真央の気持ちが見えたような気がした。

そして、それは僕はもちろん、真央にも当て嵌まることで・・・真央の世界に僕はどの程度存在し、関わる事ができているのだろうか？

『真央にとって、椋本くんは良い意味で特別だから　大丈夫』

彼女の身内からある意味のお墨付きは貰ってるけど、それだって、所詮は第三者の言葉。本人の意思は不明瞭なんだ。

では、僕の意味は・・・？

僕は真央を望んでいる？

僕は真央を特別だと思ってる？

僕にとって、真央はどの程度の存在なのだろう・・・。

「そないなわけやから・・・翼の連絡先、教えて欲しいんやけど」
「え？」

言われ、慌てて現実へ目を向ける。

恐いくらいに真摯な瞳をした真剣な表情とぶつかり、僕はコクンと喉を鳴らした。

「連絡先って・・・携帯ぐらい知ってるだろ？まして、一線越えた仲間ならなおさら・・・」

「翼、携帯に出えへん。メールも送つとるけど、反応ない」

そういえば・・・話しながらしきりに携帯弄ってたような。

ちよつと失礼じゃないか？と気分悪くも思ってたけど、纏うオーラが剣呑としていて、“君子危うきに近寄らず”の通り、あえてスルーしてたが・・・なるほど。必死に翼と連絡取ろうとしてたわけだ。それにしても・・・と思う。

「・・・ねえ、お前　小笠原はさ、翼になにしたんだよ。嫌がるこ

とでもしたんじゃない？」
「嫌がることなんて・・・」

言いかけて、思い当たる節があったのか、彼は眉間に皺を寄せると、押し黙る。

「・・・やっぱり、相当、痛かったんかな・・・翼の、めっちゃ狭かった・・・」

「は？」

「俺はもの凄い気持ち良かったんやけど、ほら、初めてって女の子は痛いだけやる？一応、気遣って、セーブしたつもりなんやけど・・・最後はもう、本能のままに」

「あー・・・やめてくれ。そっちの話は・・・興味ないから」

色濃い事情を口にされ、僕はあからさまに耳を塞ぎ、聞くことを拒否した。

僕にだって、知識として男と女の間にある行為がどういうものかぐらい解るし、好き合っている同士が合意の上でしたことにまで首を突っ込むつもりはない。

まして、翼の性格を考えれば・・・初めてのことが辛かったから、目の前の男が嫌いになったなんて有り得ない。双子の姉は無垢で一途で、とても情愛が深い善い子だ。

相手を想い過ぎて退くことはあっても・・・ああ、そうか、そういうことか。

血の繋がりとというものは、ときにとても鋭く相手の思惑を理解できる利点がある。

僕の中で、翼の行動と思考の謎が一気に解明された。

全く・・・こんな短い期間で、それほどまでに目の前の男を好きになるなんて・・・まして、一晚の関係でも構わないと自らを差し出すほどに、翼の想いは深く大きい。

果たして、それに見合うだけの想いを小笠原が持っているのかどうか・・・。

「・・・そんな無理させたんじゃない、嫌われたのかもね。顔も合わせたくないほど、携帯も無視するほどじゃ、もう諦めるしかないんじゃない？」

「嫌や」

「嫌って言うてもなあ。恋愛って片方の気持ちだけにするもんじゃないだろ。翼のたれを思うなら・・・男らしく身を退いてやるのも、優しさってもんだよ」

「俺は半端な気持ちで翼を望んでるわけじゃない。傷つけてもうたんなら、癒せばいい。翼を諦めるなんて選択肢は、俺の中にあらへん」

迷いのない想いは、おそらく、同じ。

これ以上の答えがあるだろうか。

二人の仲は・・・本物なんだ。

「・・・はあ・・・もう、すっごい複雑・・・。翼は小笠原を嫌ったりしてないよ。むしろ、好きで好きで仕方ないから、黙って僕と入れ替わって、去ったんだと思う」

「好きやのに・・・なんで？」

「男子校に通う小笠原と、女子校に通う翼じゃ、距離があるだろ。常に一緒に居られないことが、翼には耐え難く思えたんじゃない？」

「たまに逢うだけじゃ、満足いかないってかさー」

「それって・・・」

無然とした顔が、期待を込めて綻ぶ。

軽くムカつくんだけど・・・翼は好きなんだよな、コイツのこと・・・

不本意ながら、僕はの事実を口にした。

「翼に滅茶苦茶愛されてるってことだろ」

「そう、なんや・・・」

ホツとしたように笑う小笠原の表情といたら・・・至上の幸福を一身に浴びてますってぐらい、嬉しそうだ。

くっそー・・・やっぱ、ムカつく。翼には翼の世界があるのは解るけど、まだ、僕は完全にその舞台から降りたわけじゃない。血の繋がりを舐めてもらっては困る。切っても切れない縁がそこにはあるんだ。

世界は二人のために在るなんて、十年早いよ。

「・・・でもさ、翼はもう、割り切ったのかもしれないね」

「え・・・」

「連絡一切、拒んでるあたり、もう二度と逢うつもりはないってことじゃん。つまり、この状態は破局だよな」

すました顔で言い、にっこり笑ってやった。

どこか恨みがまし気に僕を見る小笠原の表情が、みるみる青くなる。

「お前・・・翼とそっくりな顔で、そないなこと言つやなんて、悪魔か・・・」

「僕は事実を言ったまでだ」

「ああ、もう、どないしよ。翼・・・頼むから、電話、出してくれ」

何度もリダイヤルする様を目の当たりに、さすがに言い過ぎた気がして、僕も携帯を取り出した。

「連絡、取つてあげるよ。僕なら、翼も出ると思うし」

「すまん。頼む・・・」

けれど、僕の予測は見事に外れる。

翼は小笠原はもちろん、僕の呼びかけにも応じることなく、ついには『この番号は現在使われておりません』のアナウンスを戴くハメにまで陥ってしまう。

僕らは情けなくも途方に暮れ、なんの因果か、同じ苦い気持ちをつ分かち合う同志として、変な友情が芽生えてしまった。

声を大にしては決して言えないけど、僕にとって、小笠原・・・空夜は、本当の意味での初めての友と言える。

上辺の頭の良さだけが目的で付き合ってきた、今までの同級生とは違い、彼はちゃんと僕の内面を見てくれた。おかげで気を遣い過ぎて疲れたり嫌な気分になったりせず、なにより素のまま居られることが嬉しかったんだ。

唯一の例外を除いて、
ただ。

07・名前の付けられない感情

「あかん・・俺、もう、あかんわ・・翼不足過ぎ・・倒れそ」

昼休み。

毎度おなじみの愚痴が始まる。

「きつちりご飯食べておいて、どこが倒れそうなんだか。だったら、逢いに行けばいいじゃん。女子校って言ったって、別に、男子禁制ってわけじゃないだろ」

「そない言つても・・あの敷居の高さは、尋常やないで？なんやジロジロ見られるし、不必要に声掛けられるわ、誘われるわ」

「まあ・・その容姿と背じゃ、女の子の興味を惹いて当然だと思うけど。残念だったね、お疲れさま」

僕が言うまでもなく、一切の連絡手段を断ってしまった翼に直談判すべく、空夜は単身、女子高に乗り込みに行ったことがあるらしい。

もちろん、厄介な事態になるのが目に見えていたから、僕は遠慮させてもらった。

結果は・・聞いての通り。

「残念だったやあらへんわ。友達やったら、一緒に行つたらって気にならへんの？まして、血を分けた姉やる。今、どないな生活してるのかとか、元気でやってるのかとか、心配やないの？」

ジトつと八つ当たりみたいに睨まれ、僕はただただ、溜息を吐いた。

「なんで当事者じゃない色恋沙汰に、第三者の僕が首突っ込まなきゃならないのさ。それこそ無粋だろ」

「それは時と場合によるやろ？今は、一切の情報がない切羽詰まった状況や。藁にも縋る思いで、俺は・・・翔を頼りたい」

「翼は大丈夫だよ。ちゃんと親友が傍に居るから・・・」

そう、僕がこうして落ち着いて現状を受け入れているのは、翼の隣にいるであろう誰よりも頼りになる真央の存在があるからだ。

なぜか、確信があった。彼女は決して、翼を傷つけないし、裏切らない。全身全霊を賭けて、支えてくれるに違いないと。

でも・・・真央自身は？

結局、あれ以来、彼女と逢う機会に恵まれず、僕は僕で代理した期間の辻褃合わせに必死で、翼同様、真央と連絡を取らないままになっってしまったている。

「・・・解った。翼の様子が解る人に、連絡とってみる」

「ほんま！？さすが、翔。持つべき者は親友やなあ！！」

「ちょ・・・くつつくな！僕は翼じゃないし、そういう趣味もないから！」

「あ、すまん。つい」

喜びのあまりか、抱きついてきた大きな身体を押しつけ、僕はその中の携帯を操作し、久しぶりにそのアドレスへメールを送った。うまくすれば、すぐに真央の目に留まり、昼休みの間に返事があるかもしれない。

しかし、世の中そんなに甘くはなく、夜になってやっと、待ち望んだ携帯が鳴ったのだった。

けれど、それはメールの着信を知らせるものじゃなくて・・・。

「・・・もしもし？」

『あたしよ、こんばんわ。メール見たわ』

受話器越しに真央の声が聞こえ、僕の心臓がトクンと跳ねた。

「あ・・・ああ、まさか、電話してくるとは思わなかった・・・。えっと、今、翼は？」

『お風呂に入ってる』

「風呂か・・・空夜も今、入浴中だ」

示し合わせたみたいなの偶然に、お互いを繋ぐ赤い糸を垣間みただがする。

『空夜・・・翼の相手ね。当然よ。二人は出逢うべくして出逢った、人生の伴侶だもん。全く・・・どうせ、交わるしかない運命なのに、別れようとするなんて、世話が焼けるったらないわ』

やれやれと肩を竦める様が想像できて、僕は笑った。

「ははっ・・・色恋沙汰ってのは、一筋縄じゃ行かないもんだしな。お互いを想えばこそってすれ違いもあるだろ？難しいとこだけど、そういうのを無くして、本当の意味で理解し合わなきゃ。所詮は他人・・・を、どこまで信用出来るかに掛かってるんじゃないかな」
『・・・・・・・・あんだでも、マトモなこと言っのね』

たっぷりの間を置いて言われ、僕は一気に声のトーンを落とす。

「なんだよ、失礼だな。僕にだってそれくらいの思考はあるさ」
『悪い意味で言ったんじゃないわよ。・・・うん、あたしも賛同できる。信用は大事よね。翼も彼のこと信用してないわけじゃないと思うけど・・・怖いんでしょうね。距離が』
「距離、ねえ・・・逢いに行こうと思えば行ける距離なのになあ」
『でも・・・その問題も、もうすぐ解決すると思う』

なにかを確信しているような言葉。
真央の予感も備え持った不可思議な能力のせいかな、ほぼ、外れることなく的中する。

彼女が解決するというのなら、良い方向に決着しそうだと言うことか。どういう流れでそうなるのか、一般人である僕に知り得る術はないけど。

『今日、あんたんとこの生徒会長が来たのよ』

「会長つて・・・甲斐谷先輩？」

『そう、黒髪の長身で、眉目秀麗な人だった。確か、会長を筆頭に三人の側近役員がいて、どれもかっこいいんだって？“美形四天王”つて、うちの女子校でも名高いわよ。まあ、確かにアレは眼の保養になったわ』

「・・・ふーん」

ピクピクと頬が引き攣る。なんか、微妙に気分が悪くなったような・・・。

なんだろ・・・。

なんとも名前のつけられない感情に支配されかけ、僕は慌てて意識を別なところへと向ける。

「てかさ、なんでうちの会長が女子校に？まさか、翼に逢いに行つた・・・わけはないし」

『 噂、知らないの？』

「噂？」

真央の話によれば、今、僕が通う男子高と真央たちが通う女子高にある大学が経営不振に陥っていて、潰れそうなんだそうだ。

それならば、と、今時古くさく男女に別れている学校を、大学をも取り込み、いっそ、共学にしてしまおうかという案が上がっているらしい。

そして、それはただの噂や案で留まらず、現在進行形で話が進んでいるとか。

『主に男子校の会長・・・甲斐谷先輩だっけ？ものすごく頑張ってるみたい。翼ともなんか話したみたいだし・・・』

「え・・・先輩、翼と遭ったの？」

『うん。なにを話したかまでは知らないけど。少なくとも、彼は味方ね。翼を見る目が優しかったもの』

はぁ・・・そんな裏事情は初耳だな。

もちろん、翼の跡目を譲り受けた僕自身、甲斐谷先輩をはじめ、生徒会の人たちと接触することはあったけど、普通に先輩と後輩の関係で、特別扱いはない。

もしかして、甲斐谷先輩って翼のこと・・・。

『とにかく、詳しい事情は彼に直接訊いた方が確実にわね』

言われ、あとで訪ねてみようかと心に決める。

「じゃあ・・・話が付けば、僕たち、一緒の学校に通うことになるわけ？」

『うん。それはほぼ、確実にと思う。多分、一ヶ月後ぐらいには実現するはず』

「つまり、翼と空夜の付き合いに問題はなくなるわけだ」

『そういうこと』

ことが進展するのは一ヶ月後にはなるけど、とりあえずは一件落着・・・なのかな。

『再会して、どうなるか・・・あとは本人たち次第ね。あたしらに出
来ることといえば・・・』

「普通に接すること、だろ？」

『・・・ちよつと逢わない間に、随分と物わかりが良くなったじゃな
い。そうよ。普通が　一番だわ』

そう告げた彼女の声が、少し力を無くして聞こえたのは、僕の気
のせいだろうか。

「・・・」

『・・・』

なんとなく会話が途切れ、受話器越しの真央の姿を思い浮かべな
がら、ぼんやり、お兄さんの言葉を思い出す。特異な能力を持つこ
とで、どんな苦悩や葛藤があるか・・・か。真央はなにかを悩んで、
苦しんでいるのかなあ？

思えば、僕は真央に対してロクなことをしてない気がする。泣か
せてしまったり、無理をさせて寝込ませたり・・・。

そうだ、僕、真央を泣かせたんだっただよね。一応、メールで謝っ
たけど、それに関して、なにも聞いてないし・・・改めて、なにか言
った方がいいのかな・・・。

「・・・あのね」

『なに？』

「あの・・・ごめん、な。病院で・・・酷いこと言って」

思い切って、謝罪の言葉を口にする。

少しの沈黙の後、深い溜息を吐きながら、彼女が応える。

『・・・もう、いいよ。あたしも、あんたが迷惑してるの気づかないで、図々しい真似しちゃったし。元々、あたしは厄介者だもん。気にすることないよ』

諦めきって自分を卑下する口ぶりに、僕の中で激しく沸き上がる感情があった。

「そんなこと、言うな」

『え？』

「僕のせいでそう思ってるなら、いくらでも謝る。あれは本当に・・・ただの軽口のもりだった。悪かったよ・・・だから、二度と、厄介者なんて言うな。お前を大切にしてる人はいっぱいいるだろ？そういう人たちの想いに対して、その発言は失礼だ」

言い切って、ハッと我に返る。

僕は今、なにを・・・

慌てて、電話の向こうの彼女の様子を伺ってみれば、くぐもった呻きのようなものが微かに耳に届いて。。

「・・・ごめん・・・僕、また傷つけた・・・？」

『・・・ちが、う・・・だいじょぶ』

「でも・・・泣いてるんだろ・・・？」

大丈夫じゃないだろ・・・明らかに、泣き声じゃん・・・。

どうやら、また泣かせてしまったようで・・・ズキズキと胸が痛む。

『・・・傷ついたわけじゃ、ないから・・・』

「ほんとに・・・？」

『うん・・・嬉し、かつただけ』

ぐすぐすと鼻をすすりながら、素直に頷く彼女の姿を想像し・・・
なんだよ・・・可愛いじゃん・・・。
不覚にも僕は、そう思ってしまった。

『・・・そう、よね。少なくとも、翼や兄貴・・・翔は、あたしを厄介者だなんて、思っていない』

そこに僕の名前が挙ったことは少し意外で、けれど、ちゃんと存在を認められていることが嬉しくて、自分でも驚くほど、優しい声が出る。

「そっだよ。僕たちはみんな、真央が大切だと思ってるんだからな」
『っ・・・あ、あり、がと・・・。そ、それじゃ、そろそろ・・・ま、ま
た』

「?・・・ああ、またな」

冷静を常とする真央にしては酷く慌てた調子で、何度ももりながら言葉を紡いだ末、性急に電話は切られた。

なにか僕はおかしなことを言ったんだろうか・・・。

自分の声が、言葉が、いかに物珍しいものだったか・・・自覚のない僕は、かなりの時間が経ってから気づいたのだった。

それ以上に、照れた様子の彼女は物珍しかったのだけだ。

08・触れられて巡る予感

翼と空夜の件は置いて・・僕には腑に落ちないことがあった。
甲斐谷先輩だ。

真央が言うには、今回の合併を現実にくべく働きかけているのは彼だという。なにより、翼と接触し、何事か話して・・見る目が優しいって、一体、どういう心積もりがあるのだろうか。

つか、完全に女の子の格好をした翼と遭ったって、ある意味、ヤバいんじゃないか。入れ替わっていたことがバレたら、なにかと問題にされるんじゃないか？

そんな危惧もあり、僕は先輩の部屋を訪ねた。

「甲斐谷先輩。椋本ですが・・少し、お時間宜しいでしょうか？」

「椋本？・・ああ、大丈夫だ。どうぞ」

唐突に訪ねたにも関わらず、快く招き入れられ、適当に座すようにと席を勧められる。

三年は一人部屋だから、当然、甲斐谷先輩と僕の二人きりで・・先輩の存在感に、軽く気圧されてしまう。

「そう緊張するな。ふむ・・やはり、双子だからといって、同じではないか。彼女は俺を怖がらなかったんだがな」

苦笑の籠ったそれに、まさかの考えが、より確実な可能性を孕む。

「先輩は・・・知ってたんですか？」

「きみらが入れ替わっていたことを、か？」

「なんで・・・」

「くくつ・・・まさか、姉弟共々に同じ説明をせねばならんとはな」

「説明？もしや・・・女子校で、翼と遭ったときに、話したんですか」

「・・・察しいいな。用事に出向いた先で、たまたま見掛けたんだな。少々、気に掛かることもあつて・・・話したよ。一応は、元氣そうだった」

「・・・そうですか、良かった。えつと、それで・・・」

「俺は初めから全て承知していたんだ。父がきみらの母君と懇意にしているね。フォローを頼まれたんだよ」

母さんが甲斐谷先輩のお父さんと・・・？

そういえば、母さんはどこその会社で社長秘書してるとか言ってたな。んで、その社長とお付き合いがどうかとも・・・その相手が、まさか甲斐谷先輩のお父さんだったなんて。

「しかし・・・本当になにも知らされていないんだな。漣みおさんも人が悪い」

自分の母親の名前を親し気に口にされ、濃い可能性に突き当たる。もし、万が一、母さんがその人と再婚なんてことになったら、甲斐谷先輩と僕らは身内になるって・・・。

ふと、真央の言葉を思い出す。

彼は味方だと、翼を見る目が優しくかったと言っていた。僕はつきり、甲斐谷先輩が翼を好きなんじゃないかと思っただけ・・・そう

いう情じゃないのかもしれない。

「俺は一人息子というやつでね。母は幼くして病気で死に、父と二人きりなんだ。決して、父と仲が悪いわけではないが・・・家族と言うものが羨ましかったよ」

僕の考えを肯定する先輩の心情を知り、確信した。

甲斐谷先輩は僕と翼を弟と、妹として見て、面倒見ているのだと。翼の辛い状況を打破すべく、動いてくれたのだということが。

見た目は迫力があって、近寄り難い雰囲気纏っているけど、本当は、情に厚い、とても優しい人なんだ。

「だから、父と澪さんが一緒になり、きみらが身内になることを、俺は歓迎している」

「先輩・・・」

うわ・・・やば・・・なんか、すごい感動。

僕の中にあつた“甲斐谷周防”という人に対する印象が、一瞬にしてプラスのみに彩られ、崇拜と言っても過言でない感情が沸き上がる。

「僕も・・・歓迎しますよ・・・兄貴、欲しかったし」

照れくさくて正面切つて言えない僕。
不意に、大きな手のひらが頭の上に乗って、やんわりと撫でられた。

「有り難う。なにより嬉しい言葉だ。俺も弟が欲しかった」

につこりと優しい笑みを向けられ、僕は・・・そういう趣味は全くないけど、ある意味先輩の笑顔に見惚れてしまい、頬を赤くしたのだった。

その後、僕が知り得ていなかった母さんたちのなれそめを聞いたり、甲斐谷家に関することも聞いたりして、先輩との距離は縮まる。そこで明らかになった驚くべき事実として、彼の父親は会社社長などではなく、この学校の理事であり、母は理事秘書という、学校に密な関係の立場にあったということ。

もちろん、僕の推薦話に関して、母がなんらかの便宜を図った裏取り引きはなく、公正な判断で決まったのだということ。

同室の友であり、翼の想い人である小笠原空夜が甲斐谷先輩の遠縁にあたる従兄弟であったこと・・・挙げただけで、かなりの収穫だ。僕が甲斐谷の性を名乗る日は、そう遠くはないだろうことを感じながら、更に月日は流れ・・・。

新学期と言うには半端な時期に、その変化は現実のものとなった。

真新しい校舎。着慣れた制服に身を包み、廊下を闊歩する。

張り出されたクラス表を前に、懐かしい姿を見つけた。

「翼ーっ！」

大声で名前を呼びながら駆け寄る。小脇で抱きついていて彼女に目配せし、その腕をやりわり解きほぐすと、僕こそがと抱きしめる。

「はぁ・・・ホント、元気そうで良かった・・・。甲斐谷先輩に聞いてたけどさ、ちゃんと自分の目で見るまでは、安心できなくて」

「・・・翔。久しぶり・・・」

僕とそっくりの容姿ながら、声はずっと高く、女の子らしい。可愛い身内を前に、僕はひたすらに上機嫌に微笑む。

見つめる先で翼はといえば、なんとなく周りを気にし、そわそわしていた。

まあ、なにを気にしているかなんてお見通しで・・・けれど、僕は知らぬを装う。

「しつつかし、まさか合併とはなー。ただの噂じゃなかったんだな」

わざとらしく言って、傍らの彼女へちらりと視線を向けた。

意図を汲み、小さく頷く。

「だいぶ前から持ち上がった話らしいけどね。男子校の生徒会長が意欲的に動いてくれたおかげで、ようやく実現したとか・・・つか、翼から離れなよ。シスコン」

「男子校と女子校の間にあった大学が経営不振とかで、紫煙と教育の幅を広げる目的で、三校合併の大学付属になったんだっけ・・・つか、うるさいな。僕に指図すんな、魔女」

敵対姿勢は打ち合わせ済み。なにも知らないであろう翼に、自分の状況が変わったことを認識してもらい、空夜と向かい合うしか道がないことを思い知らせる。

もちろん、くつつくか別れるかは本人たち次第で、深く立ち入るつもりはない。

さて、それじゃあ、爆弾投下といくかな。

「それはそうと・・・翼。空夜見なかった？先に来てるはずなんだけど」

軽い口調でその名を口に訊ねてみた。

「・・・さ、さあ？・・・ごめん、私、ちょっとトイレ行って来る」

「んじゃ、あたしも・・・」
「いや、混んでそうだし、真央ちゃんは翔と先に教室行ってよ。鞆だけお願い」

面白いほど予想通りの動揺を見せ、場を去ろうとする翼。

仕上げとばかりに、僕たちはお互い洗面になり、嫌々といった調子で言葉を重ねた。

「えー・・・シスコンとお？」

「だから、シスコン言うなって、この魔女」

「そっちこそ！あたしの名前は真央。まーお！だいたい、シスコンはシスコンじゃん。それとも・・・ナルシストって言おうか？自分そっくりの顔した翼大好きなんてさ、ナルシストだよねえ」

「な、ナルシストお！？か、勝手なこと言っちなよ！僕は翼と全然違うだろ！？」

苦く笑いながら離れて行く気配。場に残されたのが、蚊帳の外であるべき二人になったところで、僕らは小さく息を吐き合った。

「行ったかあ」

「行ったわねえ」

「なあ・・・あの二人、うまくいくの？」

「いくわよ」

迷いのない答え。

「そっか・・・良かった」

大きな安堵感が広がる。

僕にとって翼は大事な半身。そして、空夜は掛け替えのない友達。その双方が最善の結末を迎えられるというなら、こんなに嬉しいことはない。

もちろん、まだ現実のものとなっただけではないが、お墨付きしたのは他でもなく、真央だ。

彼女の勘は絶対的に信用出来る。

「んじゃ、僕たちは言われた通り、一足先に教室行ってるか・・・。翼の鞆持つよ」

「・・・」

手を差し出すものの、真央は再び、張り出されたクラス表に目を向け、黙り込んでしまう。

なんだろう・・・誰か気になるヤツでもいたのか・・・？

ざっと見る限り、僕の知り合いといえば・・・翼に空夜、そして、

目の前の真央だけ。

僕の知らない誰かに意識を取られている彼女が、なぜか少し、腹立たしく感じた。

「ほら、貸せつてば！」

半ば、強引に真央の手から鞆を奪おうとした拍子に、お互いの手が触れ合う。

・・・え？

細い指先のあまりの冷たさに、僕は目を見張った。

なんでこんなに冷たいんだ・・・？

よくよく、真央の顔を見てみれば、どこか固く強張っていて、微かに血の気も退いている。明らかに様子のおかしい彼女がいた。

「・・・真央・・・？」

恐る恐る名前を呼んでみる。

と、真央はゆっくり視線を足下へ落とし、黙ったまま、僕の手をギョツと握りしめた。微かに震える指の理由を訊ねる前に、その手は離れ、望む鞆を持たされる。

「鞆、よろしく。教室・・・行きましょ」

「あ・・・ああ・・・」

彼女に触れて、頭を巡ったのは 嫌な予感。

・・・いや、僕の勘など、真央のそれに比べたら的中率のないもので・・・うん、絶対、アテにはならない。

そう、良い意味で外れると高を括っていた僕は、この後に起こる騒動のことなど、露ほども考えられなかった。

09 ・ とても簡単で難しいこと

気のせいなんかじゃない。

彼女の足取りは、見るからに重かった。後に続きながら、ゆっくり過ぎる歩調に何度、ぶつかりかけたか分からない。

いい加減、理由を尋ねようとも思ったけど・・・真央の全身が発する固い雰囲気伝わって来て、声を掛けることさえ憚られる。

そここうしてる間にも目的地は近づいて、ようやく、僕らは教室に辿り着いた。

やはり、躊躇う背中に痺れを切らし、言う。

「・・・緊張してんの？初顔合わせはお互い様じゃん。ほら、早く入って」

「あ・・・」

トンツと肩を押し、教室の中へと押し入れる。

瞬間、ざわめいていた室内が少し、静かになった。見れば、クラスメイトであろう女子の目が、一斉に僕ら・・・いや、真央に向いている。

その視線は決して好意的じゃなく、一言で言えば“嫌な感じ”だ。なんだ？

「・・・ごめん。あたしもトイレ行って来る。鞆お願い」

「え？あ・・・お、おい！」

言うが早いか、真央は教室を出て行ってしまふ。

三人分の鞆を抱え、立ち尽くすしかない僕。

なんなんだよ・・・もう。

訳が解らず、困惑しながらも、そのまま立ちっぱなしでいるのも間抜けだと思い、とりあえず、出席番号で割り当てられた席へと移動した。

鞆三つを机の上に重ね置き、ホッと一息吐く。

「ねえ、あなた・・・あの子とどういうご関係？」

横からの唐突な問いに目を向けると、いかにもお嬢サマといった風体の女の子が、数人の女子を従え、僕を覗き込んでいた。

今逢ったばかりの子にそんなことを訊かれる意図が見えず、僕は曖昧に返事をする。

「どういって言われても・・・友達だけど。それがなにか？」

「まあ・・・その様子だと、知らないようですね。あの子がどんなに忌まわしい存在か」

なに言ってるんだ、この女・・・。

ますます混乱するしかない物言いには、しかし、たつぷりと刺が含まれていることだけは分かった。真央を決して快く思っていない、むしろ、邪魔とはつきり表情に出ている。

「忌まわしいって・・・どういうこと？てか、きみ、誰？」

「あら、失礼。わたくし、西園寺さいおんじかおるこ薫子と申します。女子校であの子とは同じクラスだったのでですけど・・・」

怯えたように目を潤ませ、表情を曇らせた彼女は、少し震える声で言った。

「あの子、普通じゃありませんのよ。気色の悪いことばかり言ってる。そういう人と関わり合いになると、ろくなことはありませんわ。悪いことは申しません、ただちに付き合いをお止めになった方が、身のためですよ」

普通じゃないって・・・霊能力のことを言っているんだろうか。

目の前の彼女　西園寺がどういう経緯で特殊な能力を知り得たのかは分からない。

でも、真央を疎んでいるのは確実に、今日遭ったばかりの僕にまでこういう忠告をご丁寧にしてくれるということは、すでに、女子校での立場は最悪といって過言ではないのかもしれない。

真央のお兄さんが言っていた“精神的”云々は、もしか、僕の言動が原因ではなく、彼女たち・・・？

「・・・随分、大袈裟なことを言うんだね。ちょっと勘が良過ぎるくらいで、別に普通だろ？気にし過ぎじゃないかなあ」

あえて、なにも知らない第三者のように振る舞い、西園寺の動向

を探る。

途端、彼女は眉を吊り上げ、激しく抗議してきた。

「あなたは上辺だけでしか物事を見ていないんですわ！あの子、このわたくしに、よりもよって得体の知れないモノが憑いているなどと言つて、不躰に背中を撫でたんですのよ!？」

「それだけじゃないわ。人気の無い空間をじっと見据えていたかと思つと、なにかブツブツ言っていたり・・・」

「気分が悪くなるから止めてつて言つても、一向に改まる様子なし・・・この上なく迷惑な存在だとは思わない?」

矢継ぎ早に言つては、表情を曇らせる彼女たち。

つまり、僕と同じ目に遭つたということなんだろう。戸惑つ気持ち、憤慨する理由も分かるけど・・・真央のそれに悪意などあるはずがない。

彼女は自然体。真実を口に、自分のできるところをただだけ。

・・・頭では解つてるんだ。それが必ずしも理解されるものではなく、大半が誤解して、退いてしまつてあるうことは。

それでも・・・。

「・・・上辺で物を見るのはきみらだろ。普通じゃないつて・・・だったら、普通つてなに?そうやって、人の悪口言う人がよっぽど気分悪いと思つよ」

自分でも驚くくらい低い声で、冷たく尖つた視線を向けて言い切る。

ほんと、気分悪い。

真央を傷つけた元凶を前に、僕はどうしようもなく苛立っていた。彼女の良さを知りもしないで、勝手な吹聴など……くだらな過ぎる。悪戯に大袈裟な噂すべてに、真央が心痛めていたのだと思うと、やりきれない。

「な……あ、あなただって、あの子のこと“魔女”っておっしゃっていたではありませんの！快く思っていないことは明白ですのに……支離滅裂ですわよ！？」

いかにも同類みたいな言い方をされ、ますます、僕の機嫌は下降の一途を辿った。

今日遭ったばかりのい第三者に、知った風な口を利かれたことも腹立たしいし、なにより、僕と真央の関係を勝手に詮索した挙げ句、賛同がなきゃ、支離滅裂だなんて……何様？

「ああ、確かに。僕は真央のことをそう呼ぶ。けど、それは愛称みたいなものだ。快く思っていないなんて、勝手に決めないでくれる？」「わ、わたくしはただ、あなたのためを思っただけのご忠告を……だいたい、被害に遭っていないから、そんな悠長なことが言えるんですわ！」

被害……被害ね。

僕はあんたらよりずっと、凄惨なモノを視た被害者だけど？

「言つとくけど、僕と真央の付き合いは昨日今日じゃない。当然、そういう体験を僕もしている。いや、むしろ・・・」

僕は類似稀な霊媒体質だと、真央は言っていた。望めば、視ることも可能だつて。

もし、彼女たちが真央を貶めるような発言をする理由がそれなら、僕も同類だと解れば、あるいは、真央への風当たりは弱くなるんじゃないか？

瞬時にそんなことを考え、僕はなにもない空間へ目を向けた。

「仲間なんだよね」

「え？」

「だって、僕にも」

ゆっくり視線を戻し、ニツコリと嗤ってやる。

被害者特有の勘のようなものが働いたのか、僕の意図をよく理解し、一気に青ざめる彼女たち。

「・・・冗談、でしょう？」

「そう思いたければ、自由にどうぞ？」

「・・・」

言葉無く、去って行く姿を見送り、やれやれと肩を竦めた。

恐らくこれで、今日中にそういう噂が広まり・・・少なくともクラス的女子大半の僕を見る目は変わるだろう。

さて・・・逃げ去った同類はどこへ行つたのやら・・・。

「・・・あんな嘘・・・馬鹿ね。あたしみたいになることないのに」

背後からの声に驚いて振り向けば、探し求める姿がそこにあった。いつの間に戻ってきたのか、真央は不機嫌な表情で立っていて、僕の肩越しに手を伸ばすと、机の上に置かれた自分の鞆を手取る。

「別に・・・半分はホントだし。僕は男だから、陰口叩かれようが、避けられようが、気にならないよ。真央と違って、図太いからね」

「あたしだって・・・図太いわよ」

「体調崩して、寝込んだヤツがなに言ってたか・・・つか、そーゆー目に遭ってんなら、言えよ」

「・・・言つてどうにかなるもんでもないし、別に・・・慣れてるもの」

頑なに自分の弱さを認めようとしない彼女が虚勢を張ってることなど、今の僕にはお見通しで、苦笑うしかなかった。

真央は・・・自然体で真実を口にする反面、肝心なところで素直になれない天の邪鬼。

このまま深く突っ込んで、自分がいかに無理していたかを思い知らせる必要があるかもしれない。

使命感のようなものが沸き上がり、僕は素直にその内なる意思に従った。

今にも自分の席に戻ろうとする手から鞆を奪い、再び、僕の机の上に置くと、今度は細い手首自身を掴み、教室から連れ出す。

「ちょっと・・・なに？そろそろ、HR始まるんじゃない？」

「初日のHRなんて、どうせ自己紹介の場だろ。僕も真央も、ある意味、紹介なんて要らないくらい目立った存在になつてると思う。それに・・・真央には僕の説教が必要そうだから」

「は？どういう・・・なんで、あたしがあんたの説教なんかっ！」

まるでこちらの自由にならない。気位の高い猫のような反応で不平不満を繰り返す真央を無視し、僕は人目を避けながらどんどん歩みを進めた。

少しベタかな？と思いながら、体育館裏の倉庫の扉を開け、中に入る。先客は居らず、室内も明るくて、なんとなくホッとした。

「・・・こんなところに連れ込んで、なんのつもり？」

逃げる様に距離を置いた彼女が、僕を睨みつけながら言う。口調はもの凄く反抗してるのに、切れ長の黒い瞳には不安気な光が宿り、僕に対しても精一杯、虚勢を張ってるのが解った。

人の気も知らないで敵視かよ・・・傷つくなあ。

「言っただろ、説教するって」

「だから、なんで説教されなきゃならないの？意味わかんない。あの子たちに対してだって、仲間だなんて・・・同情のつもりなら、やめて。言ったでしょ？慣れてるって」

「・・・どっちが嘔吐きだよ。慣れてるヤツは逃げたりしない。あいつらの顔見るのも辛いほど、傷ついたんだろ？確かに、真央とは口

喧嘩のが多くて仲良しってワケじゃないけど・・・力を貸すぐらいの度量はあるつもりだよ。僕に言ってもどうにもならないなんて・・・勝手に決めんな」

言い切って、真つ直ぐに真央を見つめる。

お互い、目を逸らしたら負けとばかりに睨み合い・・・先に音を上げたのは彼女。ふいつと視線を外し、俯く。

「・・・なんで・・・」

「ん？」

「急に、そんな・・・優しいの？兄貴に、なにか言われたから？」

優しい？僕が？真央に対して？

確かに、お兄さんと話して真央の事情を知り、『これからも宜しく』みたいなことは言われたけど、他人に言われたから・・・なんてことはない。

なんで？そんなの・・・僕がそうしたいから。

じゃあ、そうしたい理由は？

・・・真央が心配だから。放ってはおけない特別な人、だから。

・・・あれ？

これって、つまり・・・僕は彼女のことを。

自分の気持ちを理解した途端、全ての辻褄が合った気がした。

いつか、自分の中に浮かんだ幾つもの疑問に、今なら、はつきりと答えられる。

僕は真央を望んでいる。

僕は真央を特別だと思っている。

僕にとって、真央は 無くしたくない大事な存在。

ああ、もう・・・こんな簡単なこと、難しく考えていたなんて・・・滑稽だ。

「・・・真央が好きだからだよ」

その決定的な一言は、自然に僕の口から出たのだった。

10・ 思えばずっと前から

人生で、これが初めての告白だった。

しかも、相手は遭えば口喧嘩ばかりの、およそ、恋愛対象には成り得ない存在。

でも、それこそが僕なりのアプローチであり、特別扱いしていた証拠なのかもしれない。

「・・・からかってんの？」

対する第一声がこれだった。

まあ、今までの態度を思えば当然の反応かもしれないけど、これでも一世一代の本気だったんだけどな。

「僕が冗談でこういうこと言う、軽い男だと思っ？」

「・・・思わない」

「だろ。つまり・・・そういうこと、だよ」

心構えもなにもなく、ほぼ、なし崩しの告白劇は後からじわじわと僕を追い詰め、あまりの気恥ずかしさに真央の顔を直視出来なくなる。

明後日の方向に目をやりながら、彼女の声に耳を傾けた。

「・・・嘘」

戸惑いながらもきっぱり言われ、言葉の意味するところの不穏も手伝い、僕はすぐに視線を戻す。

「なにが嘘？」

「翔は・・・あたしのこと、嫌いはず。好きなわけないもん」

「あのなあ・・・現に、言っただじゃん。それで、なんで嘘になるわけ？信じないのさ」

「だって・・・あたし、“魔女”だし。普通じゃないし。疲れるって、迷惑だっけ言っただじゃないの！」

いつかの病室での失言を引き合いに出され、一瞬、言葉に詰まる。今、それを蒸し返さなくても・・・罪悪感に萎れそうになる心をなんとか奮い立たせ、首を振った。

「病室でのことは、何度でも謝る。だけど僕、真央が嫌いなんて、一度も言っただことないよ」

「そっかえば・・・でも、急にこんな・・・」

困惑する真央。

うん、僕だってこんな急展開、予想してなかった。

「正直、僕もついさっき自分の気持ちに気づいて、勢いで言っただけがあるから・・・真央も同じ気持ちを持ってくれとか、付き合

って欲しいとかそういうの全然考えてないよ」

けど、もう口を突いて出てしまった以上、取り消せないんだ。

「なにも変える必要はないし、なにも変わらなくていい。今まで通り、普通で・・・ただ、僕の想いを嘘だと言うのはやめてくれ。ちゃんと本気なんだからさ」

それでも、初恋だしな・・・。

別に綺麗なイメージのまま、取っておきたいとかじゃなく、本気の想いを冗談にされるのは、振られるより切ないと思った。

「・・・今まで通りで、本当にいいの？」

「え？」

「あたしは嫌よ。無理」

「・・・そっか」

明確な拒絶に、僕はこの告白劇の結末を、いかに身勝手に都合良く考えてしまったかを思い知る。

けど・・・考え無しに行動した結果が最悪でも、受け入れるしかないよな。時間は巻き戻せない。真央が嫌だと、無理だというなら、僕らの関係はこれで・・・。

「折角、両想いなのに今までと同じなんて、勿体ないじゃん」

言われたことを理解する前に、ドンッと軽い衝撃が身体を襲い、腰に回った細い二の腕が抱きついて……。艶やかな黒髪から香る匂いも、柔らかな感触も、初めて逢ったときと同じ。

違うのは……。背中を叩かれ、身を退かれることがないこと。そのままの姿勢で、時が過ぎてゆく。

えーと……。えーと……。

自分にとって都合の良過ぎる返事を貰えたことがとても信じ難く、僕の頭は完全にフリーズしていた。

と、彼女が胸元で小さく身じろぎし、反射的に視線を落としたところで、かち合う。

「……なんとか言つてよ。あたし、一応、きちんと返事したんだけど……」

「え？……あ……ああ……」

僕と真央の身長差は数センチ。至極近い距離にある、ほんのり赤く染まった顔とか、はつきり言つて目に毒だ。

てか……。真央はなんて……？

じわじわと思考が戻つて来る。

両想い？返事？つまり……。聞き違いじゃなく、そついつと……？

「・・・あの、さ」

「なに？」

「真央、僕のこと・・・好きなの？」

やっぱり信じられなくて、ストレートに訊ねてみた。

瞬間の彼女ときたら・・・面白いほど素直な動揺を見せる。まず、ほんのりだった顔色は、今や熟れたトマトみたいに真っ赤で、耳までも赤く染まっていた。

答えは明白。嬉しい気持ちはもちろん、そうになると、どうしても真央の口からちゃんとその単語を聞きたくなる。

「なあ、どうなの？ちゃんと見えよ」

「・・・返事したって、言ったじゃん。つまり・・・そういうこと、よ」

「“そういうこと”って？」

「解ってるくせに・・・」

むくれる頬にそっと手を添えると、驚くほど熱い温度が伝わり、滑らかで柔らかな肌の感触に心奪われてしまう。

やばい・・・なんか真央がすごく可愛く見える。

いや、実際、彼女は器量の良い方なんだけど・・・そういう基本を抜きにしても、全てが僕を魅了するんだ。

「・・・言っつてよ。僕は真央が好きだ。真央は？」

「・・・あたしも、翔が・・・好き」

観念したのか、やっと明確な言葉を口にする彼女。
僕の中いっばいに広がる暖かい気持ち。目の前の顔が愛しくてたまらない。

どうしよう・・・すっげー触れたい・・・。

込み上げる感情を抑えきれそうもなく、そっと顔を寄せた。

「真央・・・キスして、いい？」

さすがに初めての行為を、勢いそのまま黙って・・・というのは気が退けて訊ねる。

と、両手で挟み込んだ綺麗な顔が不機嫌に歪んだ。

う・・・やっぱ、性急すぎるよな・・・。

「ごめん、今の忘れて・・・」

動物的な思考で欲求を口にした恥ずかしさから、慌てて手を離そうとしたのを、一回り小さな手が覆い被さり、止められた。

拒まれたはずなのに、その行動は真逆で混乱する。

「真央？」

「・・・わざわざ・・・」

「うん？」

「断らなくていいよ。なんか、ムードない・・・」

ええ・・・断らなくてって、つまり？

瞳を揺らしながら言う彼女の表情は怒気を孕んでいて、いまいち真意を量り兼ねる。

だけど、でも、やはり“そういうこと”なのだろう。だって、真央だし・・・“好き”という単語を口にするまでも、かなり間があった。

無理強いではなく、同意の上というお墨付きが貰えたせいか、僕の中で意識が変わる。

「それって・・・キスしていいってこと？」

無遠慮に間近から覗き込み、再び、明確な単語を口に、彼女の反応を伺った。

「だ、だから、いちいち訊かなくていいってば・・・」

「でも、ちゃんと了承しないと。僕もそうだけど、真央も初めてだろ？キス」

「っ・・・キスキス言わないでよ！恥ずかしいじゃん！！」

真央の顔は居たたまれないほど真っ赤で、彼女が尋常じゃない羞恥に襲われているのが分かる。そんな表情で睨まれても、ちっとも迫力ないんだけど・・・。

クスクスと忍び笑ってしまったのを、更に鋭い目で睨まれ、慌てて笑いを噛み殺す。

天の邪鬼な彼女に、素直な返事なんて酷なことかもしれない。これ以上、下手に突っ込んででも頑になるだけ。

「・・・もういい・・・翔がこんな性格悪いなんて思わなかった・・・離して」

一歩遅く、完全に機嫌を損ねてしまったらしい真央は、重ねていた両手を僕の胸に押し当てると、身を引き剥がすべく、力一杯押し来た。

あーもう・・・。

その手を取って下へ押しやる。

「よくないよ」

「いいの！翔とは・・・しないっ」

「僕はしたい」

「だったら、余計なこと言わないでさっさとすれば」

不平不満は唐突に途切れる。

他でもない。僕が塞いだからだ。

初めて触れ合った唇は、蕩けそつに柔らかく、理性が飛びかける。

「んっ・・・」

少し苦し気な喘ぎを耳に、意識が戻った。

唇を離し、顔を遠ざけ、一定の距離を置いて彼女を見る。

「真央・・・泣いてるの？」

閉じられた目の縁に涙が滲んでいることに気づき、不安になった。
同意を得たと思ったのは、僕の傲慢だった？

「・・・ごめん、嫌だった？」

「・・・ちが、う・・・だいじょぶ」

「でも・・・」

既視感。

いつかの電話でのやりとりが脳裏に鮮明に蘇り・・・。

「・・・嬉しかった、だけ？」

「・・・うん」

今度は素直に頷いてくれた。

自然と頬が緩む。

これが満たされた状態なのかなあと、漠然と思いながら、僕は真央の腰に腕を回し、抱き寄せた。

安堵する温もり。

手に入れた存在は、なによりも大事な一番。

「僕も・・・嬉しい。初恋が叶った」

思えばずっと前から、僕にとって真央はただ一人、他とは違う特別な女の子だった。

好きだったんだと思う。

今日からただの口喧嘩相手じゃなくなるね。
もう、友達じゃないから・・・。

そう、僕たちは痴話喧嘩相手になるんだよ。
どう立場が変わろうとも、たった一つだけ変わらないこと。

僕の相手は、常に君だけ。

【カウンター - 終 -】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9906s/>

counter-カウンター-

2011年8月23日21時44分発行